「お金をかけない暮らし」

谷口吉光（秋田県立大学）

お金がかかる世の中になりました。

戦後の高度経済成長が始まる以前、日本人はみんな貧乏だったので、「お金があれば幸せになれる」と単純に思っていました。だから 1960（昭和 35）年に池田内閣が「所得倍増計画」、つまり今後 10 年間で国民所得を 2 倍にするという計画を打ち出した時、国民は勇んで働き、その後 GDP（国内総生産）世界第 2 位の経済大国にのし上がりました。

今でも、中国に抜かれたものの GDP 世界第 3 位の地位を保っています。しかし、貧しかった頃に想像したような「お金があれば幸せになれる」という生活は実現したでしょうか。確かに、多くの人は家を持ち、テレビや自動車など一通りの家財道具を揃えることはできるようになりました。でも、見方を変えるとあらゆるものを手に入れるのにお金が必要になりました。子どもが生まれれば、紙おむつ、ベビー服からおもちゃなどを買わなければならないし、高齢者は自分の家と耐久消費財を維持する費用が払えるかを心配しなければならなくなりました。

お金を稼ぐことができればいいですが、若い人たちには稼げる仕事はあまりありません。稼げなければ「貧困」という現実に直面します。生きていけないほどの貧困を「絶対的貧困」といい、周りと比べて貧しいことを「相対的貧困」といいますが、豊かな時代が実現したために相対的貧困が増えるという皮肉な現象が起きています。

どうしたらいいのでしょうか。安倍内閣は「GDP600 兆円」や「国民総活躍社会」という政策を打ち出して、「もっとお金を稼ごう」「女性たちは家庭を出て働こう」と呼びかけています。でも、その先にあるのは、もっとお金がかかる暮らしではないでしょうか。そこには望んでいた幸せはあるのでしょうか。

私は逆に、お金をかけない暮らしをめざした方が幸せに近づけるのではないかと考えています。女性が働きに出て、家のご飯が加工食品や惣菜ばかりになるよりは、家庭で材料から料理や保存食を作る暮らしの方が結局家計の節約にもなり、家族の絆も深まるという方向も考えるべきではないでしょうか。

たとえば、秋田では旬の食べものを隣り近所や知り合いに「おすそわけ」するという伝統が生きています。おすそわけしてもらった人は相手に必ず「お返し」をしますから、結局長い目で見れば「お金のかからない暮らし」を実行していることになります。

こうした秋田の伝統を生かして、新しい市民活動や社会事業（ソーシャルビジネス）を立ち上げることができないでしょうか。

（北羽新報「トランジションの風」 2017 年 9 月 21 日掲載分に加筆・修正した）